

燕岳で思うこと

教育研修部

水口 伸介

MINAGUCHI SHINSUKE

山は苦行である。

今夏、燕岳（標高2,763m）に登った。その姿から「北アルプスの女王」と称される。合戦尾根ルートで山頂を目指す。最も一般的なルートだが、北アルプス三大急登の一つとあって、最初の休憩地・第1ベンチに辿り着く前に「もう帰りたい」と弱音が漏れる。第3ベンチ辺りが標高2,000m。空気が薄くなり、さらに体力が奪われる。「もはや限界」と連れ合いに憐れみを乞うが、鬼嫁は容赦がない。引張られるように、さらに上へ。そして標高2,500m、森林限界に達する。今まで頭上を覆っていた高木がなくなり、青空が目眩しい。

山は天界である。

稜線に立つと北アルプスの山々が一望できる。燕岳は花崗岩の奇岩が山頂まで連なり、別

世界だ。古神道に常世（とこよ・永久に変わらない神域）なる語があるが、古代人はこうした風景を見て常世を感じたのであろうか。

だが、その神域にも気候変動が忍び寄る。燕山荘オーナーいわく「年々、雪が少ない上、春の雪解けが早まっている」。天界も人の仕業で揺らぐのだ。現世人類の威力は凄まじい。燕岳の山頂で思った。



編集後記

本号巻頭の「事業報告」では、今年9月に韓国で開催された第9回三国間ネットワーク会議について報告しております。会議ではAI活用等による廃棄物管理システムの高度化の状況、資源循環に係る規制動向等の情報交換を行いました。

「調査報告」では、家庭から排出される食品廃棄物の資源化施設へのヒアリング調査結果を取りまとめています。資源化の推進には、施設整備だけでなく、地域に応じた分別・収集方法の工夫や異物混入抑制という入口から、安定した利用先の確保という出口までを一体として捉えることが重要であるとしています。

「コラム」では、循環経済への転換について、国際的な普及動向、国内の法や行動計画等、各分野の動向についてご執筆いただいております。

「連載」では、循環型社会実現には、循環経済による環境負荷

低減などの公益的価値を含む「新たな付加価値の創出」が不可欠であり、経済システムの改革が求められることなどを提言されております。

「欧州の最新動向」では、オランダの廃棄物追跡制度について、日本の電子マニフェストと照らし、トレーサビリティの設計思想の違いなどを考察いただいております。

「産廃鼎談」の第19回は嘉門雅史様をお迎えしています。「環境地盤工学の確立と社会実装」と題し、環境地盤工学という分野を確立され、長年にわたり土木工学の見地から環境問題を調査研究されたご経験をお話いただきました。

最後に、ご多忙の中ご執筆いただいた皆様、記事作成にあたり編集にご協力いただいた皆様、本誌を読んでいただいた方々に心から感謝申し上げます。（広報室）

■本誌に関する連絡先：総務部広報室（e-mail:jigy@jwnet.or.jp）

<アンケートへのご協力のおお願い>

より充実した誌面作りのために、本誌の記事内容等に関する読者アンケートを当センターホームページ（以下のURL）に掲載しています。

本誌に関するご意見、ご要望を是非、お聞かせください。

URL https://www.jwnet.or.jp/info/kikansi/kikansi_anq/index.html

JW センター情報（季刊）VOL.26 NO.3

発行日：2026年10月15日発行 発行人：関莊一郎

発行所：公益財団法人 日本産業廃棄物処理振興センター

〒110-0005 東京都台東区上野三丁目24番6号
上野フロンティアタワー13階

TEL: 03-5807-5911 FAX: 03-5807-5912

<https://www.jwnet.or.jp/>

デザイン・印刷：株式会社太陽美術